本の楽しさ教えよう

書物は、長い年月にわたって人類が作り上げて来た文化の、凝縮されたものです。人間にとって、これ以上に価値のあるものは考えられません。書物は言わば人類の宝庫です。

しかしながら、その宝庫も、これを開ける鍵を持たない者にとっては、どうすることも出来ません。書物も、これが読めない者にとっては、正に“猫に小判”であり、全く価値のないものになってしまいます。

そこでどこの親も「本を読ませるための工夫」に悩むわけです。私もよく「本を買ってやるのだが、一向に本を読んでくれない。どうしたら読んでくれるようになるのか」という相談を受けます。

そもそも“本を読みたがらない”のには、二つの理由が考えられます。一つは、「本の楽しさをまだ知らない」ことです。本の楽しさを知らなくて、どうして本を読みたがるでしょう。この場合は、「本というものは楽しいものだ」ということをわからせることがまず必要です。

それには、幼いうちから童話やおとぎ話をよく聞かせてやり、次にそういう書物を読み聞かせてやることが大切です。そうすれば、書物というものはおもしろいものだ、ということは自然とわかるはずです。

そうなれば、「早く独りで本が読めるようになりたい」という気持から、「早く漢字を覚えたい」という気持が起こり、漢字に対する関心が強まって、自然と早く漢字を覚え、読書能力が身につきます。

“本を読みたがらない”第二の理由は、「書物を読む能力が弱い」ことが挙げられます。書物を全く読めないようでは、勿論読みたい気持があっても読みませんが、読む力はあってもその力が弱いと、やはり書物を読みたがらないものです。

ちょうど足の弱い人に、遠い景色の美しい名所を散歩することを奨めるようなものです。そういう名所を散歩することの楽しさはよくわかっても、足が弱い人では「歩いてみよう」という気持にはなかなかなれません。足の強い人は歩きたがりますが、足の弱い人は歩くことを極力避けようとするものです。

それと同じことで、読書能力の強い子供は「本を読むな」と言われても本を読みたがるでしょう。反対に、読書能力の低い子供は「本を読みなさい」と言われても、本を読むことを極力避けようとするわけです。

“本を読みたがらない”というのには以上の二つの理由が考えられますので、“本を読ませるための工夫”としては、この二つの理由のい

ずれによるものかをまず見定めて、それから対策を考えることが必要です。

本を読みたがらない理由が第一の理由だった場合については、「本というものは楽しいものだ」ということをわからせることが必要だ、ということはすでに述べました。また、その対策についても、物語りを聞かせることや書物の読み聞かせが大切だ、と述べました。

絵本や漫画もキッカケに

その他、絵本や漫画などから入るのも一つの方法です。ただ絵本や漫画ばかり読んでいますと、親の方がいらいらして来て、「そんなものはやめて、ちゃんとした本を読みなさい」と言いたくなるものです。これが問題です。

絵本や漫画は、本の楽しさを子供に知らせるのにとても役に立つものです。だから、こういうものを通じて本に十分に親しませる一方で、漢字を読む力を養って行けば、自然と高良の本を読むようになって行きます。

ところが、親はせっかちで、子供の読書能力のことを考えないで、ただ高度の本を読ませようとします。しかし、足の弱い者には楽しい遠足が苦痛なように、読書能力の弱い者には読書が苦痛なのです。いくら読書をすすめたところで、読もうとするものではありません。

そういう子供が、絵本や漫画を読むのは立派なもので、「よく読んでいるね」と言ってほめてやるべきものです。それだけの価値がある行為であり、事実、ほめてやりますと、子供はもっと高度の本を読んでみよう」という意欲が湧いてくるものだからです。

こうしておいて、他方で漢字力をつけてやる方策を実践していれば、子供は必ず高度の本を読むようになります。足を強くする訓練を続けていれば必ず足が強くなり、足が強くなれば「歩くな」と言っても必ず歩くようになるのと同じことです。

足が弱い間は決して遠出はしませんが、足が強くなれば、近所の散歩などでは満足できなくなるものです。それと同じように、強い漢字力そ身につければ、絵本や漫画では満足できなくなるのです。

だから、絵本や漫画でも楽しんで読んでいるのを心配する必要はないのです。それが高度の読書への踏み台になるのですから、読まないことの方がほんとうは心配なのです。